



秋風のせいかしらん。

ダーク系の多かったメールセッションでした。

エントリーは以下の10作品です。

覇者は？ 話題作品は？ 作者の声は？

もろもろの情報は <http://www.columnland.net/> にてどうぞ。

／
伝えたいことはいろいろと。

インターネットや携帯電話でやり取りされるメールのことを「電子メール」と言うわけですが、当然ながら、時と場合によってメールで伝えるものは違います。

例えば、

『差出人…母』

件名…ちよつと

本文…みりん買ってきて』

これが伝使メール・・・つまり、お使い要求です。

こういうのは素直に従いましょう。晩ごはんのために。

『差出人…〇〇（↑プライバシー保護のため名前は伏せさせていただきます）』

件名…決めました

本文…私、うどん職人になります!!』

これが伝志メール。要は、所信表明です。

・・・こういうのは、口に出して言った方がモチベーションが上がると思うんですがね。

いやむしろ、何で突然うどん職人になりたいと思ったんでしょう・・・。

『差出人…△△』

件名…頭の中に映る情景

本文…透き通る青空の空

聞こえてくる鈴の音

だれの耳にも届くだろう』

・・・えー、これは伝詩メール・・・にして・・・伝思メール・・・です。

・・・何と言いますか、下手な詩ですね・・・。。。。まあ、何がしたいかはわかりますが。

もし伝思の方に気づかなかったら一体どうするつもりだったんでしょうか。気づいても痛々しいですけど。

・・・とりあえず、ごめんなさいとだけ言っておきます。

他にも、伝史メール、伝姿メールなどがありますが、いろいろと話しにくいので紹介はしません。

さて、このように・・・

ホー・・・ホケキョ（着信音）

あれ？メールが・・・。どれどれ。

『差出人…□□』

件名…（なし）

本文…もう死にます』

ああ、これは伝死メール。つまりは自殺ひょ・・・って、ええええええっ!?

ど、どうしよう・・・と、とりあえず電話電話・・・でっ、出ないっ!?

す、すみません!!ちよつと急用ができたのでこれで失礼します!!

こ、このように、メールではいろんなことが伝わりますので、上手に活用して楽しい毎日を送って下さいねっ!

・・・そっ、それでは!!

今日の午後五時半に、屋上で待ってます

いつもの彼女らしくないメッセージを片手に、屋上への階段を昇る。
重い扉を押し開け、茜色の空を仰ぐ。

風に髪をなびかす彼女の後ろ姿を、フェンスの向こう側に見つけた。

私を思ってた

「おい！そんなところで何してんだよ！」

思わず叫んだ俺の方へ顔を向け、彼女は寂しそうに微笑む。

「女の子はね、勘がいいの。だから、嘘をついてもダメだよ？」

「はあ！？いきなりなんの話だよ！いいから」

「ねえ！」

その一声に、黙らされてしまった。

「なんで私がこの時間にあなたを呼び出したか、わかる？」

いつもとは違う、凜とした声。

「この茜色の時間は、一日で頭が一番鈍くなる時間なんだって
まっすぐな眼差し。」

「それなら、私も嘘を見抜けないかも知れないじゃない？」

こんな真剣な彼女は、今までに見たことがなかった。

何も言葉にできず、ただただ見つめ合う。

茜色が、黒みを帯び始めた。

「ねえ。私のこと、好き？」

その問いかけに、俺はすぐ答えることができなかった。

彼女は、そんな俺に背を向ける。

「もう一度だけ、聞くね？」

「待ってくれ！もし俺が」

「私のこと！好き？」

「っ！……ああ。好きだ！」

「そっか……。ありがとね」

彼女の声が、ふわりと空に消える。

その瞬間、まるで音のない世界に迷い込んでしまったようだった。

その中でただ、彼女からの着信を知らせる旋律だけが鳴り響く。

私もあなたのことが好きでした

——ぼくの言葉は、いつも心の中で停まっていた。けれども今は、それをみんなに届けられる。そのきつかけは、ある一つの出会いだった。

【……そしてぼくが、入れ替わる】

…文化祭からそのまま持ち込んだ活気が、茫洋とした空間の中に流れている。臨はその中にながら、どこか一步距離を置いて見ていた。空になったのは積まれる缶ビールの山、それを作り上げて目が据わってきた、クラスメイトたちを、どこか羨ましそうに眺める……するとその中の一人が、フラフラと立ち上がり彼のもとにやってきた。

「あつ、アンドゥ、この後二次会でカラオケ行くんだけど、おまえもどうよ？」

臨は困惑した。そしてとりあえずの笑顔で応えた。

「む、だんまりこくなよ」

さらに彼は何かを言おうとする。しかしそれは、背後からの声に遮られた。

「あ、あ、お前酔いすぎだつて。とりあえずちよつとき、そこら辺散歩してようぜ、な？」

一人のクラスメイト、中野達也はそういつて気を利かすと肩を貸し、二人を離れた。そのとき一瞬だけ臨の方を向くと、申し訳なさそうに右手を顔の前に置いた。

……また、困った笑顔でしか応えられなかった。

臨は八歳のとき事故で喉を潰してしまい、それ以来声が出せなくなった。学校の中で、彼は一人であることが多かった。

「……」

彼は一気に、手に持った飲み物を空にした。

——と同時に、新たな飲み物を渡された。

「飲んでる？」

臨には、彼の名前が出てこなかった。目立たないとは印象が違、なんだかおぼろげな男だった。

「やっぱさ、一人は辛いよね。まるで真つ暗な箱の中にでも押し込められてるみたいだ」

男の台詞は、それだけ聞くとただの酔っ払いの戯言のようだった。しかし、その口調は真剣そのものだ。

「でも、そんな箱の中にも、君の救いはあるかもしれない

……バイトをする気はないかい？」

臨は家に戻るとパソコンを起動させ、男に言われた手続きをとった。とはいっても、やったことといえば、ただサイトにメールアドレスを作っただけだ。

『Ahn.XX……』

……一旦手を止めると、彼は少し恥ずかしくなつて、結局Eの部分を消し普通の、自分の名前に書き直した。

バイトの内容は、ようはただの悩み相談だった。メールを通して悩みを受け、相手を慰めて、勇気づける、ただそれだけのことだ。臨は最初こそ戸惑った。しかし慣れるとそれは彼にとって、非常に相性のいいものだった。

彼は、コミュニケーションに飢えていた。心の中に溜まり続けた言葉は熟成され、大きな渦となつて、電腦の海に溶けていった。彼は真摯に人々の悩みに答え続け、そしてやがて、ネット上で話題の人物になった。特に正体を隠そうとしてもしな

かったので、いつしか彼は学校内でも有名な人になっていた。そして何人かのクラスメイトとぼしき人物もサイトを訪れ、そして赤裸々な秘密を、彼に打ち明けていった……彼は自分が、この世界に始めてピタツ、とはまったような気がした。

だが、その世界は、あっさりと崩れ去ることになる。

臨はいつものように授業を受けていた。退屈だがその時間は、彼にとつて決して苦痛なものではなかった。

しかし、あるときを境に、教室には暗鬱とした雰囲気と、彼に対する刺すような視線が満ちていった。

何人かの女子生徒が、机に突つ伏し泣き始める。

「おい！」

驚いて振り向くと、そこには達也が立っていた。その顔は狂犬のようで、今にも飛びかかってきそうである。

「大人しそうなツラして、まさかこんなやつだったとはな」

「……？」

「とぼけてんじやねえぞ！ こいつはお前からだろ！」

そういうと彼は、自分の携帯電話を臨に突き出した。

——そこには、今まで臨にクラスメイトから寄せられた相談、全てのそれらが、相談者の名前とともに書かれていた。

臨には、当然見当がつかなかった。彼には送信者を割り出すといったようなことは一切出来なかった。

……しかもそれは、彼のアドレスではなかった。

『Ahn.XX……』

それは、彼が結局恥ずかしくなつて、使わなかったアドレスだった。勿論、そのことを知っているのは彼だけである。

臨はアドレスのことを達也に話した。しかし、

「ふざけんな！ こいつはデメーのアドレスだろうが！」

その答えは、またしても臨の予想外のものだった。何かがずれている……彼は用具もそのままに、教室を飛び出した。

全速力で家へ、自分の部屋へと戻ると、彼はパソコンを起動させ、自分のサイトへと飛んだ。簡素な画面が、相も変わらず彼を待ち受けていた。自分の息が荒い。それは決して走ってきたからだけではなかった。彼は奇妙な閉塞感を感じて

いた。まるで自分というピースだけが、暗い箱の中に押し込められたかのような……

「……う……あ……」

口からノイズを洩らしながら、彼は一つのメールを送った。それは簡潔で、しかしそれ以上の言葉は見つからなかった。

『おまえは誰だ？』

それから何秒が経ったかもわからなかった。あるいは永遠かのようにも感じられた。彼の画面が揺らめいた。そして真つ

黒な画面に、悪意に満ちた笑みが流れ、一言。

「おまえこそ誰だ？」

一瞬放心した彼が、その直後に感じたのは、強烈な圧迫感だった。小さな箱が彼を飲み込む。骨が折れるのも、心臓が潰れるのも構わないかのように、躊躇いなく飲み込んでいく。

「うヴヴヴヴヴァアアアア！」

そして彼の意識は消えた。そしてその代わりに——

ある日ぼくは遠目に、自分の姿を見つけた。それはとても寂しそうな顔をしていて、ぼくは愉快でたまらなかった。ニヤツ、と笑いかけるとノイズは泡のように消えた。

ぼく、ヒト。

ほかのいろんな動物は
食べて寝てればいいけれど
それじゃぼくは生きられない

だってぼくは、ヒトだから
いつでもつながり求めている
独りの夜に震えてる

ぼく、ヒト。

ぼくらは毎日進化する。

世界最高の発明は

核兵器でもロケットでもない
このちいさなちいさな携帯電話
もちろん電話自体じゃなくて
携帯電話のメール機能

もう、ぼくは独りじゃない
夜もだれかとつながって
いろんな話ができるんだ

相手に迷惑かけないで
自分の時間も縛られず
親指で作る文字のなか
いろんな思いを混ぜるんだ

相手の顔色におびえずに
不意の沈黙に戸惑わず
かわいい絵文字に感情託し
いつでもだれかとつながれる

ぼく、ヒト。

他のだれかとのつながりが
ぼくのなによりのごちそうさ

メールを使ってつながって
ぼくは夜を過ごすんだ
送って読んで送って読んで
そのうち夜も過ぎてゆく

昼間無口なぼくだって
メールの中では饒舌だ
どんなにくだらぬ話題でも
明るくニッコリ絵文字をつけて
カッコワライで盛り上げる

昼間話さぬ人だって
ほら、ちやあんとメールをくれる
いろんな人にもとめられ
ぼくは夜をすごすんだ

楽しい楽しいヒトとのつながり
楽しい楽しいヒトとの時間

こうして夜は過ぎてゆく
もう、ぼくは独りじゃない
ほら、またまた新着メール
やっぱりぼくは独りじゃない

そう、ぼくはヒト。

「霊長類、サミシガリ科。」

初めは軽い気持ちだった。ほんのいたずらのつもりで、自作の「呪いのメール」を友達全員に送ってみた。(このメールを見た人は、三日以内に同じ内容のメールを三人に送らねば、死にます) そんな文面だった。

三日後、私の友達の一部が自殺した。首つり自殺だった。彼女の死は悲しかったが、すぐに日常の波に流され、忘れ去られていった。私自身の記憶の中からも。

三ヶ月後の午前零時、私のもとに「呪いのメール」が届いた。私が送ったのと全く同じ文面だった。私の創ったメールがここまで広がっていると思うと、何だか誇らしい気持ちを感じた。気がつくと私の携帯には三〇件ものメールが届いていた。全て「呪いのメール」だった。九〇件も送信するのは面倒だったから、無視した。

次の日の朝、かなりの量のメールが届いていた。全てが「呪いのメール」だった。あまりの量に気持ち悪くなって、その日のうちにメールアドレスを変えた。

次の日の朝、数百件のメールが私の携帯に届いていた。さらに止めどなく新たなメールが届き続けた。そして、気がつくと部屋の中には自殺した彼女がいた。どこから吊られた縄に首を括られ、どす黒くうつ血した顔の潰れた目でこつちを見ていた。彼女と私の距離は二メートルぐらいだろうか。彼女は分厚く腫れた唇を金魚のようにパクパクと動かしながら、何か言葉を紡ごうとしていた。そこま

でが限界だった。私は声なき悲鳴とともに部屋を飛び出し逃げ出した。だが、彼女は私から二メートルの距離を保ち続けた。いや、むしろ少しずつ近づいていた。周りの人間には彼女は見えなかった。私は「呪いのメール」をアドレス帳にある限りの人間に送り続けた。だが、私が一通送る間に、三通のメールが届いて、すぐに大量のメールが溜まっていった。

長い時間をかけて、彼女は私に徐々に近づいてくる。そして、彼女と私の距離が一メートルを切った時、彼女の後ろには他の多くの首つり死体が吊られているのに気づいた。まるでめがれる前のリングみたいになら下がっていた。彼らの手には携帯電話が握られていて猛スピードで文字を打ち込んでいた。彼らが送信ボタンを押す度に、私の携帯電話が新しいメールの到着を伝えていた。その日の午前零時近く彼女は私の目の前にいた。

彼女の唇がかすかに動いた。そして、彼女は音なき声で私に言った。「ごめんね。怖がらして。でも、怖いのはもうおしまい。あなたを助けてあげる。今から私の言うことをよく聞いてね。・△・○××□×▼。」彼女の言葉で私の心に希望の明かりがともった。彼女に言われたコトを終えて、私は大きく希望の一步を踏み出した。一三階の窓の中から外へと。私の体は落下した。私の首と窓の手すりを繋いでいたロープがびんと張った。彼女の最後の言葉を心の中で反芻した。彼女は言った。「私たちの仲間になりました。」と。

ボキッと何かの折れる嫌な音がした。もう恐怖は感じなかった。

Vibration

机の上の携帯が不意に唸り声をあげた。
友達からのメールだ。

いつも通りの流れで携帯を開き、そのまま返信画面へ。

内容を確認しながら新しい内容へと書き換えていく。

書き連ねるのはどうでもいい世間話。

そう、内容なんてどうでもいい。

重要なのは私が相手に返信をするという事実。

“友達”とつながっているのだという事実。

仲の良い友達と始めたメールは、いつしか仲の良さを保つためのメールに変わった。

かつて私の意思をつむいでいたはずの親指は、もうただの操り人形。今はただその関係を保つだけの道具に過ぎない。

自分の意志とは関係ない、無難な内容を書き連ねていく。

トモダチニキラワレナイヨウニ

トモダチヲオコラセナイヨウニ

嘘をつく時さえあった。でもそんなことはどうでもいい。

今はただこのメールが続いていてくれさえすれば。

ワタシガウシナワレタイク

メールを送信し終えて一息つく。
そこでやっと私は元の私に戻る。

ふいに携帯の画面が消えた。電池切れだろうか。

急いで電源を入れようとするが——入らなかった。

マズい、返信が来るかもしれない。

そうやって焦る気持ちとは裏腹に突然別の感情が生まれてきた。

——これで解放された……

そう思うととても気が軽くなった。

友達なんか関係ない。メールだけの友達なんて。

今の私に必要なのは間に合わせの友達なんかじゃなくて自分を再確認すること。不確かな自分のままでは本当に人と接することなんてできない。

大事なのは私が私であること。

そう気がついたときふいにまた携帯の電源が入った。壊れているのか——それとも私がただ短い夢を見ていただけだったのか……

手の中の携帯がまた不快な音を立てた。先ほどの返信に違いない。

大丈夫、私はもう気にしない。

The only thing I need to be myself is myself.

或る一つの、儚い恋の物語。

前から考えてたんだけど、そろそろ、会ったりできないかな。
そんな、外見とか気にしないからさ、俺と君の仲だろ？

*

これは、出会い系で知り合った彼から送られてきた、メールです。
本当に、嬉しかった。私を必要としてくれる人なんて、今まで誰もいなかったから。
私は、それを受け入れ、そして少し時が経って、
胸を、ときめかせながら、待ち合わせの、場所へ。

*

彼に会えなかった。
それからメールの返信も来なくなり電話をかけてもいつも留守番電話になったし、
どうしたのかな？ 寂しいよ、寂しいよ。
どんなに短い間隔でメールしても電話しても、全然反応してくれないよ。
何らかの理由で携帯電話が使えないとか？ だとしたら彼の家へ行くしか？
だけど、今、彼について知ってることは携帯の電話番号とメールアドレスだけだし？
どうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう。

*

携帯の電話番号から、住所が分かりました。
最初は出来ないと思ってたけど、案外簡単に調べる事が出来ました。
それなりに、お金はかかった。だけど、彼への気持ちに比べたら、容易いものです。
とにかく、これで、彼に会いに行ける、嬉しい。

*

なぜ？ 何が起こったの？
彼の家に行って電気が点いてたから家にいるんだなって思って、
インターホン押して、私の名前を言ったら、すぐに切られたよ。
私に会いたかったんじゃないの？ ねえ、どうして？
早く扉開けてよ！ 早く、早くして！

*

あれから、数日の間、何回も何回も何回も、インターホンを押したけど、彼は出てきませんでした。
おそらく、彼は恥ずかしがり屋です、心の準備ができてなかったんです。
なので、彼の家の郵便箱に、今度家に入りたいことを書いた手紙を、入れました。
彼への愛情を表すかのように、いっぱい、いっぱい、手紙を入れました。
もう、そろそろ、彼も心の準備が出来た頃、彼の家に入りたい、と思います。
今まで、何回思い描いていた、瞬間でしょうか。

*

ああああああああああああああああああああああああああああ！
彼が死んでる！ アスファルトの上で血を流して死んでる！
なんで？ 私のせいじゃない私のせいじゃない！
私はただ彼への愛を伝えようと彼の家に入っただけなのに！
それだけなのにただそれだけなのに！
彼は私の顔を見ると罵声を浴びせ狂ったように私から遠のいて！
私はそれを追いかけて！ 彼をベランダに追い詰めて！
彼を抱き締めようと近づいたら彼は！ 彼は！

*

彼は、美しい鳥のように、ベランダから宙に舞い。
それならば、私は、彼を追いかける、のみ、です。
天国では、きっと、一緒に、なれるかな。
或る一つの、儚い恋の物語。

僕は死んだほうがいいのだろうか。
僕は死ぬべきなのだろうか。

僕には君を殺す方法がわからない。
僕が死んで解決するのならそれがいいのかもしれない。

二人をつなぐもの

なぜ僕がこんなに思い話をしているのかというと、全ては一通のメールが始まりだった。
正確にはもつと前から始まっていたのかもしれないが。

“僕を殺してくれないか”

いきなりこんな言葉を突きつけられたらどう思うだろうか。少なくとも僕は何がなんだからわからなかった。学校から帰ってつけていたパソコンのメールを夜に開いた。ただそれだけである。それまでに変なサイトにアクセスした覚えも無い。差出人の名前は書かれていないがどこかで見たことのあるアドレスだった。誰だったか思い出せないからそのまま保留することにした。今思えばあそこでもつと深く考えるべきだった。まともに返信するべきかどうか悩んだが、とりあえず何があつたのかを聞くことにした。その後は眠ってしまったのかと思うほど何も覚えていない。

翌日、学校から帰ってメールを開いてみた。最近は妙に一日が短く感じていた。学校に行こうとしたらもう帰りという具合である。学校で何をしたかとも思い出せないくらいだった。

“もう死にたい”

昨日の返事が返っていた。話によると学校でのいじめがひどいらしい。物を隠されたり閉じ込められたり、と。

そう言われて僕がなんと返事していいのかわからない。僕が言って変わることもあるのだろうか。とにかく励ますことしか僕にはできなかった。

なぜメールを送信したあとの記憶が無いのだろう。毎日覚えていることが少なくなっているように感じる。今日だって朝学校に登校したという記憶はかろうじてあるがそれ以外はもうすぐ夕飯だと言うのに何も覚えていない。体にも覚えの無い打ち身のような痛みがある。どこでぶつけたのだろう。

“僕を殺せ”

メールを開いてみたがとうとう命令口調になってしまった。彼のメールには学校でのいじめがエスカレートしてとうとう暴力まで振るわれるようになったと書かれていた。だからといってどこの誰かもわからない人に「殺せ」と言われてもどうしようもない。僕は君がどこの誰かを聞くことにした。送信のあと眠らないように注意して。

数分後、返信が返ってきた。僕は何も考えずにそれを開いた。それは返信なんかではなかった。そこには僕が書いた文章がそのまま書かれていた。

濁流

優しく笑った君。

心配してくれた君。

確かな光をくれた君。

でも、ある瞬間に、

他の誰かの隣に歩く君を見つけた。

ずっと待っていた。

本当に好きだから。

好きじゃないと言われるのが怖かった。

でも、僕の心にいま、

真っ黒な感情の大渦が巻く。

離したくない。

抱きしめたい。

ずっといて欲しい。

笑って欲しい。

僕のためだけに。

暴走する感情の濁流に飲まれた。

どうすればいい。

どうすることもできない。

もう脆くなったコンクリートの塊で、

洪水を止めるのは、いつまで持つのだろうか。

すべてに怯えながら、

僕はまた、他愛も無いメールを打つ。

君は、遠くの街へ独り飛び出した。ずっと描いていた夢のため。

毎日、君は私にメールをくれる。寂しがりやの私のため。

君は、なんとか頑張ってるみたい。

だから私も、頑張ってみる。

「保存メール 23通」

"Re: "

私は消さないことにした。

君に宛てた、書きかけの想いの数を。

君に「会いたい」と、送ってしまいそうになった数を。